

山内博之(2009)『プロフェッショナルから見た日本語教育文法』ひつじ書房。
山田ボヒネック頼子・高木三知子(2012)『OJAE 実践研究と日本語教育還元化 - CEFR: B レベル (B1 & B2)の『結果性』構成力を中心に』*The 19th Princeton Japanese Pedagogy Forum Proceedings May 2012*. Dept. of East Asian Studies, Princeton Univ., Princeton, NJ, 192-213.
吉島茂, 大橋理枝 (2004)『外国語教育 II-外国語の学習, 教授, 評価のためのヨーロッパ共通参照枠 (Japanese translation of afore-mentioned CEFR)』朝日出版社。

発表3 「コミュニケーション能力の養成と評価—談話研究の観点から—」

宇佐美まゆみ (東京外国語大学院)

【要旨】

近年の口頭能力の評価においては、文法や文型の正しさだけでなく、スピーチレベルの使い分けができるかというような観点も盛り込まれ、現実のコミュニケーションの中で何が使えるかという「運用」の観点を重視するようになってきた。しかし、未だ、敬語が正しく使えるといった文レベルの表現を超えた、談話レベルから捉えたボライトネスや、適切なあいづちの打ち方、相手の中途終了型発語を受けて共同発語文を完成させる形で発語を確認したり、共感を表すというような、聞き手側としての反応の仕方を評価に組み込むところまでは至っていない。本発表では、母語話者の自然会話におけるやりとりの特徴の分析を行うとともに、それらを OJAE 評価法 (特に受験者同士の『交話』部門) の談話データ、OPI のデータと比較分析することによって、「コミュニケーション能力」の養成とその評価法について考える。また、コミュニケーション能力の養成に、今後、どのようなことが必要かを考える。

1. コミュニケーション能力と談話

日本語教育において、「コミュニケーション能力の養成」の必要性が叫ばれるようになってから久しい。しかし、日本語教育の現場では、未だに「コミュニケーション能力」を効果的に習得させるような実践が行われているとはいえない。その理由の一つに、そもそも「コミュニケーション能力」とは何かということが明らかにされていないということがある。もう一つは、「コミュニケーション能力」の養成に適した教材がないということがある。現実には、コミュニケーション能力の養成の多くは、現場の教師各々の「コミュニケーション能力」というものについての考え、「その指導の仕方の工夫」と、目標言語の環境で経験を積むというような「学習者の自己努力」に依存しているとも言っても過言ではない。

このような状況では、本来、妥当性と信頼性のある「コミュニケーション能力の評価」を考えることは難しい。一方、様々な現実的ニーズから、アメリカでは、ACTFL (American Council on the Teaching of Foreign Languages) の OPI (Oral Proficiency Interview), 欧州では、CEFR (Common European Framework of Reference for Languages), そして、それらの流れも関係して、日本では、「JF 日本語教育スタンダード」等、昨今、様々な

評価法が、様々な形で発表されるとともに、利用もされている。しかしながら、これらの評価法では、いずれもコミュニケーション能力にとって重要である「交話能力」、あるいは、「対人コミュニケーション能力」というものがほとんど扱われていないといっても過言ではない。

これらの状況を踏まえ、本発表では、このような現状を改善するためには、次の(1)から(3)が急務であることを主張する。

- (1) 「コミュニケーション能力」の実態を明らかにするような「談話研究」を充実させる。
- (2) (1)の結果明らかになった「コミュニケーション能力」の評価の方法、妥当性、信頼性についての研究を推進する。
- (3) (1)の結果明らかになった特徴を十分に生かせる「コミュニケーション能力養成」のための教材開発研究を推進する。

2. コミュニケーション能力と評価

本発表では、『BFSJ』による日本語話し言葉コーパス (トランスクリプト・音声) 2011年版 (宇佐美, 2011) から実際のやりとりを抜粋しながら、まずは、日本語母語話者の対人コミュニケーション能力、交話能力にかかわる特徴について、談話研究の観点から論じる。また、母語話者、非母語話者を問わず、「コミュニケーション能力の養成」のためには、今後、どのようなことが必要なのかを考える。これらの分析を踏まえた上で「コミュニケーション能力」の評価を考えるために、OPI のやりとりのデータと、口頭産出能力試験評価法としての OJAE 評価法 (特に受験者同士の『交話』部門) の談話データを、主に、対人コミュニケーション能力、交話能力という観点から分析する。その際、「コミュニケーション能力」については、主に、次の(4)から(6)の3点 (宇佐美, 2012) を検証する形をとる。

- (4) 「コミュニケーション能力」とは、文法的に正しい文や複雑な文を一人で作ることができるといえる能力ではなく、「相手の発話の意図を理解する能力」と「理解したことを適切に相手に伝える能力」、さらには、「相手が言わんとすることを予測する能力」と「予測したことを適切なタイミングで相手に伝える能力」、および、相手への配慮を言語で表現する力から構成される。
- (5) 「聞き手としての反応」は、文法的には難しくなくとも、話し手の発話の意図を即座に理解し、それに適した反応を返す必要があるという意味で、高度なコミュニケーション能力の一つである。
- (6) 母語話者のコミュニケーションの仕方を観察し、その特徴やボライトネス効果などを見抜く観察力、類推力もコミュニケーション能力の一部を成している。

3. コミュニケーション能力の養成と評価—談話研究の観点から—

上記の分析を踏まえて、「コミュニケーション能力の養成」については、次の(7)から(9)のような研究が必要であることを提起したい。

- (7) 文型や機能の観点からだけでなく、様々な「活動場面や状況」に現れる自

接触場面での日本語のインタナーアクション行動

—学内と学外に着目して—

鄭圭弼 (東明大学)
 横須賀柳子 (国士館大学)
 張 璐 (桜美林大学大学院修士)

1. はじめに

21世紀初頭の現在におけるグローバル化の特徴の一つとして、アジアの経済発展が挙げられる。これに伴い、世界各地の人々が国境を越える移動を繰り返している。日本においても、アジアを中心に様々な国や地域から、転住、留学、就職などを目的とした外国人移動者が増え、これらの領域にかかわる日本語使用のニーズや多様化が進んでいる。外国人日本語話者はこれらの領域へどのように参加しつつ、日本語でインタナーアクションしているのだろうか。本パネルは、学内において中国人日本語話者が参加する大学院アカデミック場面と韓国人留学生が参加するインタナーシッピング場面、そして、学外で韓国人ビジネス関係者が参加するビジネス場面に着目する。その後、各自がある課題を日本語でどのように遂行しているのか、その過程の一端を探り、遂行を可能にしているものを明らかにすることを目的とする。本パネルは3つの論文から成っており、これらの論文では、対象者が行う文脈の考慮やリソースの工夫および応用を重視する社会文化的アプローチ(レイヴ&ウェンガー 1993; ネットストブニー 2002; 宮副ウオン 2003等)を援用している。具体的な研究課題は次の3点である。学内において、(1)大学院生同士による協働研究のグループデザインセッションにおける中国人日本語話者(以下、CJ・1名)のこぼれや行動について検証する。(2)韓国人留学生(2名:以下、KM, KF)が予備職業人として参加するインタナーシッピング場面での相互行為について掘り下げる。(3)実際のビジネス営業場面において、新取引関係の構築に関わる韓国人ビジネス関係者(以下、KB・1名)のインタナーアクション行動について探る。本パネルの構成を[表1]に示す。

[表1] 本パネルの構成

節	発表内容	予想時間	発表者
1	はじめに(背景, 目的, 課題, パネル構成)	3分	鄭圭弼
2	本パネルにおける研究方法(協働者, データ, 分析方法および理論的枠組み) 【論文1】大学院アカデミック場面におけるインタナーアクション行動—意味交渉に着目して—	7分	鄭圭弼
3	【論文2】インタナーシッピング場面で の課題遂行過程におけるイン タナーアクション行動	25分	張 璐
4	【論文3】韓日ビジネス場面での インタナーアクション—新取引 関係の構築過程に着目して—	25分	横須賀柳 子
5	【論文3】韓日ビジネス場面での インタナーアクション—新取引 関係の構築過程に着目して—	25分	鄭圭弼

然な語彙・表現や会話のストラテジーという観点から、コミュニケーション活動のあり方、および、それらの修得のプロセスを可視化し、体系化していく研究(8)(7)で得た知見を日本語教育のカリキュラムの中に効果的に位置づけていくための研究

(9)教材としては、「自然会話を素材とする教材」の試作(宇佐美, 2009; 参考WEBサイト)とその開発評価のための研究

また、「コミュニケーション能力の評価」については、OPIやCEFRの問題点を指摘するとともに、OJAE評価法が「交話部門」を設定していることの意味や今後の課題にも触れる。また、談話を支える文法という観点からの「文法のコミュニケーション能力に占める位置づけとその評価法」などについても合わせて考察する。それらを踏まえた上で、今後、「コミュニケーション能力の評価」に関する問題の解決に「談話研究」がいかに貢献できるかについて論じる。また、今後の「日本語教育における評価のあり方」、ひいては、「日本語教育が扱う内容や方法」についても考えたい。

【引用文献】

宇佐美まゆみ (2009) 『伝達意図の達成度』『ポライトネスの適切性』『言語行動の洗練度』から捉えるオーラル・プロファイゼンシー 鎌田修・山内博之・堤良一編『プロファイゼンシーと日本語教育』、ひつじ書房: 33-67。
 宇佐美まゆみ (2011) 『BTSJによる日本語話し言葉コーパス(トランスクリプト・音声) 2011年版』

http://www.tufs.ac.jp/ts/personal/usamiken/btsj_corpus_explanation.htm

宇佐美まゆみ (2012) 「母話話者には意識できない日本語コミュニケーション」野田尚史編『日本語教育のためのコミュニケーション研究』、くろしお出版: 63-82。

【参考サイト】

宇佐美まゆみ (2013) 「自然会話を素材とする日本語コミュニケーション教材」
http://www.tufs.ac.jp/ts/personal/usamiken/ncrb_main.html (2013年3月31日ダウンロード)